研究主題

思いを伝え合う楽しさを実感できる英語科の展開

近江八幡市立島小学校

Ⅰ　主題設定の理由

本校は昨年度より、文部科学省の教育課程特例校の認可を受けるとともに、市教委員会の「ハロープロジェクト事業」の研究指定校として、平成３２年度からの新教育課程に向け、英語科の授業研究や環境作りに取り組んできた。

これまでの本校児童の言語活動に関する実態を見れば、話す相手や時と場合に応じて適切な言葉を選び、ふさわしい態度で、自分の思いを積極的に表現することが難しかった。その原因には、少人数校であるがための、固定化された人間関係の中で過ごすことによるコミュニケーションや生活経験の少なさ、固定観念に固められた閉鎖的な考え方等があると考えられる。

昨年度の取組の中では、恥ずかしさや難しさを感じつつも、積極的にコミュニケーションをとろうとしたり、思いや伝えたいことをどのように表現をすればよいかを ALT や教師と一生懸命考えたりする児童の姿が見出された。これは、英語という新しいコミュニケーションツールを使ったことの効果を示していると思われる。

そこで、今年度は、子どもたちが自然と誰かに「伝えたい」と思うことができ、心と心が通い合ったり、互いの思いが通じ合ったりする感動や喜びが得られるようなカリキュラム作りなどを推進するため、本主題を設定した。昨年度の実践の中で効果的であった学習内容を再度整理し、一人ひとりの児童がもつ魅力が発揮されるような指導を試みたい。

Ⅱ　研究の仮説

英語をツールとしたコミュニケーション活動を通して、互いの思いが通じ合う感動や喜びが得られるような体験を積むことができたら、自然と「自分のことを知ってもらいたい」、「相手のことをもっと知りたい」という気持ちが芽生え、児童は主体的に英語を使ってコミュニケーションを図ろうとするだろう。

Ⅲ　研究の方法

１　授業・カリキュラム作り

（１）児童が自分の思いを表現し、伝え合う楽しさを実感できるような指導方法や教材開発について、実践的に研究する。

（２）６年間の発達段階や、小中連携を意識した授業づくりについて研究する。

（３）他教科や学校行事、学年行事、児童会活動等と関連した単元構成と活動を工夫して、島小独自のカリキュラムを構築する。

（４）朝の短時間学習等、日常的に英語の音声に触れられるような場面を設定する。

２　環境作り

（１）ALT や学生ボランティアと連携をして、掲示板や壁面を活用した外国語や外国文化の発信を行う。

（２）イングリッシュ・ルームを設置し、児童の学習意欲を高める雰囲気づくりを行う。

３　評価の工夫

（１）各学年の発達段階と、学年間の系統性を考慮した評価規準を設定する。

（２）各授業、各単元における児童の変容を確認でき、指導に生かせる評価を工夫する。

（３）児童が自分のよさや伸びを実感できる自己評価や相互評価の在り方を工夫する。

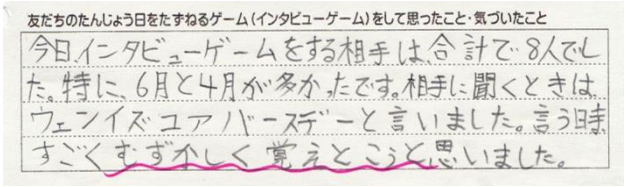
Ⅳ　授業実践事例（授業公開順）

１　第６学年（５月）

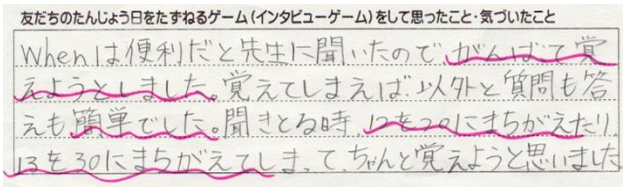
『英語での月の言い方を知って、誕生日をたずね合おう』と題し、Hi, Friends! 2 の教材をベースに、各月の表現や、互いの誕生日を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ活動を行った。本時では、友だち同士で How are you? と挨拶の言葉を交わし合ったり、How's the weather today? の質問に答えたりするウォームアップを行った後、ALT の後に続いて月の表現をリピートする発音練習を行った。

この時の HRT の大切な役割は、ただ単調な反復練習になって児童を退屈させないよう、声の強弱をつけたり、スピードに変化をつけたり、発音について特に留意させたい部分は強調して繰り返すなど、音を印象づけるような工夫を加えることと、児童の発話を増やすための支援を行うことである。本時では、タンバリンを鳴らしたり手拍子をつけたりして児童の発声を促すなど、言葉での指導はなしにして英語独特のリズムを感じさせるための支援が随所に見られ、参観教師は多くのことを学ぶことができた。

児童の振り返りシート


友だちのたんじょう日をたずねるゲーム（インタビューゲーム）をして思ったこと・気づいたこと

今日インタビューゲームをする相手は合計で8人でした。特に、6月と4月が多かったです。相手に聞くときは、ウェンイズ ユア バースデーと言いました。言う時すごくむずかしく覚えとこうと思いました。


友だちのたんじょう日をたずねるゲーム（インタビューゲーム）をして思ったこと・気づいたこと

Whenは便利だと先生に聞いたので、がんばって覚えようとしました。覚えてしまえば以外と質問も答えも簡単でした。聞きとる時、1を2のにまちがえたり、12を30にまちがえてしまって、ちゃんと覚えようと思いました

本実践は、今年度より新設したイングリッシュルームの活用、HRT・ALT・JTE の３名の役割分担、クラスルームイングリッシュの活用、英語科授業の構成の仕方などについて、本校のその後の授業実践のベースとなっていくような基本スタイルの提案の場となった。

２　第２学年（６月）

『みんなでオリジナルブックを作ろう！』と題し、様々な色と動物が登場する、『Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?』の英語絵本を題材とした授業を行った。本時では、それぞれが好きな色と動物を組み合わせて絵を描いた、世界に一つだけのオリジナルブックを使ってゲームを行った後、そのストーリーにメロディーをつけ、最後に皆で歌って授業を閉じた。

本時で見られた支援の一つに、座席の配置がある。児童の椅子が半円状に並べられ、互いの表情がよく見えるようになっていた。全員が隣り合わせに顔を並べることで、自然と楽しい雰囲気が生まれ、全員でその空間を共有できるというメリットを見出すことができた。

児童が描いたオリジナルのストーリーカード

そして、“オリジナルの魅力”を再確認できたことも、本実践の成果と言えよう。児童が自作した絵カードを教材として授業の中に活かすことが、児童の「もっと言いたい」、「もっと聞いて欲しい」、「もっとやってみたい」の気持ちを揺さぶり、意欲の上昇につながった。児童の生き生きとした姿には、与えたものではない良さというものがはっきりと映し出されていた。低学年の児童が言葉を記憶するためには、視覚的支援となる教材は非常に有効である。英語が好き、嫌い、関係なく、皆が楽しんで取り組める活動になった。

3　はばたき学級（６月）

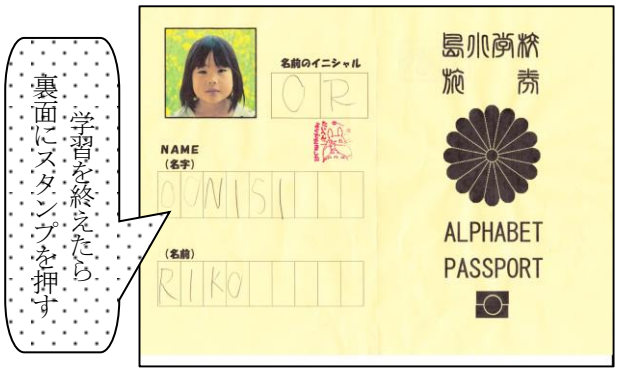
『色や形で遊ぼう』と題し、色と形の名称に慣れ親しむ活動を行った。学年、学力、発達段階、特性が異なる児童らに、どんな教材を与えるべきかを悩んだ結果、児童の身近にあって、難聴児であっても視覚から情報を取り入れやすい「色」を教材化することにした。ただ、色だけではこれまでに学習をしてきた内容と変わらないので、新しい知識として「形」も取り入れることにした。

本時では、円（Circle）三角形（Triangle）正方形（Square）の三つの形を扱い、色との組み合わせで弁別するという算数科の要素も組み込んだ活動を行った。参観教師から９枚の色・形シールを集め回ってシートを完成させる BINGO ゲームに続き、床に散りばめられたカードの中から、ALT から指示された色・形のカードを２人が１組になって協力しながら見つけ出すという、カルタゲームを行った。

本実践は、英語を学習することが主ではなく、互いに相手を意識して思いを伝え合うことに楽しさや喜びを感じることが主のねらいであり、そのツールとして英語があると位置付けた。相手を意識するということは、コミュニケーション能力の第一歩である。「相手に伝えたい」、「相手と仲良くなりたい」、「自分の言ったことが通じたらうれしい」、「相手の言っていることがわかると楽しい」などといった気持ちを児童が感じることができれば、より主体的に人との関わりを広げることができる、という可能性を感じる実践であった。

４　第３学年（１０月）

『オリジナルパスポートを作ろう』と題し、国語科のローマ字学習とも関連付けて、これまでは漢字とひらがなだけでしか表してこなかった自分の名前を、アルファベットで書くという活動を行った。本時では、教室に配置された様々な単語カードの中から、自分の名前を完成させるのに必要なアルファベットを含んでいる単語を選び、“パスポート”と銘打った自分だけのオリジナルカードにそのアルファベットを書き並べていく活動を行った。



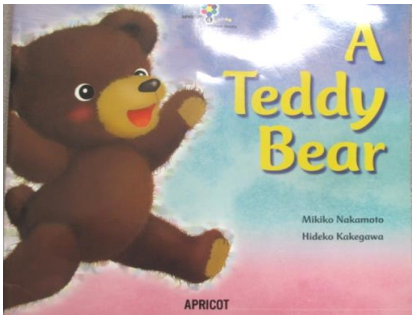
ゲームの中には、ただ文字を判断する力をつけるだけでなく、英語を話したり聞いたりしながら会話表現に慣れ親しんでいけるような場面も設定した。児童が選んだアルファベットが正しいかどうかのチェックはALTかJTEが行うようになっていたため、自分から英語を話したり、相手の英語を聞き取ったりする流れが自然と生まれる。コミュニケーションには必然性が必要ということがよく言われるが、工夫あるルール設定により、それが上手く実現できた。

本実践は、文字への興味が高まり、「書く」ことへの意欲が芽生え始めた３年生児童の実態に非常に合致した内容であり、夢中で活動に取り組む子どもたちの姿があった。アルファベット表記とローマ字表記には、若干の相違があるという、言語に対する気付きにもつながる取組ができたのではないだろうか。

５　第１学年（１１月）

『オリジナルモンスターを完成させよう』と題し、歌やゲームなどを通して１～１０までの数とボディーパーツ（胴体、頭、目、鼻、口、耳、腕、足、しっぽ）の表現に慣れ親しむ活動を行った。２年生の実践と同様、低学年児童が興味を持ちやすい英語絵本の読み聞かせによってボディーパーツの導入を行い、♪Head, Shoulders, Knees and Toesの曲に合わせて自分の体をタッチするなど、歌を歌いながら、また、体を動かしながら言葉を覚える練習を行った。

本時では、既習の数とボディーパーツを組み合わせてチームごとにモンスターの絵を描く、「モンスターゲーム」を行った。ここでは、数のくじを引く児童、ボディーパーツのくじを引く児童、その二つの情報を正しく聞き取って絵に描き表す児童、そして、その３名の児童を応援席からサポートする児童、と全員に役割を与え、楽しい活動の中にも、児童の集中を途切れさせないためのルールや、発話回数をしっかりと確保するための仕掛けを組み込んだ。また、ALTの正しい発音に何度も触れさせ、それを繰り返し真似させる機会も設けた。



本実践では、体を使って英語のリズムを体感する活動が、低学年の発達段階においては大変有効であるということを再確認できた。

導入で使用した絵本教材
『A Teddy Bear』
著者：中本幹子　発行者：荻原弘子
発行所－株式会社アプリコット

6　第５学年（１１月）

『台湾の小学生と友だちになろう！』と題し、台湾清水國小学の５年生児童らと２度の Skype 交流を行った。まずは、調べ学習で相手国についてある程度の知識を備えた上で、１回目の交流では、既習の“My name is ~.”と“I like ~.”の表現を使った自己紹介を行った。本時では、“What ~ do you like?”や“Do you know ~?”と相手に質問をする表現を追加し、友だち同士で２回目の交流に向けてのリハーサルを行うペア学習を行った。「伝え合う」とは、“伝える”だけの一方的な働きかけではなく、“聞く”姿勢も大切にしなければならない。そのため、本時では、自分が聞き手となる時には頷きや相槌をうつなど、相手からの投げかけに何らかの反応を示しながら聞くということも指導した。

出会ったことのない相手であり、更に日本語が通じない相手という状況に、児童は興味を示すとともに戸惑いを感じていた。しかし、それこそが、狭いコミュニティーの中で生活をしている児童らが、自分の思いを伝えることの難しさに気付くための良いきっかけとなったのである。どのようにすれば自分のことが相手に正しく伝わるのか、自分の表現に不足しているものは何なのかを、一人ひとりに考えさせることができた。

本実践は、普段から互いのことをよく知っている間柄では感じられない、伝わった喜び、伝えることの楽しさなど、コミュニケーションの楽しさの本質を感じることができた。

7　第４学年（１２月）

『２分の１成人式でできるようになったことを発表しよう』と題し、“I can ~.”と“ I like ~.”の表現を使って保護者の前でスピーチを行う活動を行った。本時は、スピーチ本番の前時にあたる授業で、ALT と JTE の前で一度リハーサルを行い、アドバイスをもらう場面だった。それを受けて自分で改善できる点を見直し、最後にもう一度、学級全体の前でスピーチを披露し、友だち同士で評価をし合うという流れであった。

原稿作りの段階では、ALT や JTE の手を借り、一人ひとりが正しい表現を教わりながら自分らしいスピーチを考えた。ネイティブの発音を繰り返

し聞いて発音を向上させたり、友だちや ALT からアドバイスをもらうことで、自分の話し方を見直したりして、スピーチの質そのものをより良いものに改善していくための手立てを経て、本番を迎えたのである。

本実践では、導入において、世界各国の成人の儀式について紹介をした。これは、「成人」の概念は国や文化によって様々であり、成人式というものが日本独自の文化であることへの気付きにつながった。児童が自国の文化に誇りをもつこと、他国の文化に興味や関心を示し、知ろうとする姿勢をもつことなど、国際理解教育の大事な視点にも気付くことができる実践であった。

V　研究の成果と課題

本校は、既述の通り、全学年の全担任が授業研究に取り組み、他教科や学校行事、学年行事と関連した島小独自のカリキュラム作りを目指してきた。他学年の授業を参観して互いに学び合うことで、６年間の系統性や発達段階を意識した授業づくりが実現でき、英語指導についての共通理解を深めることもできた。昨年度までは英語科指導案を一度も書いたことがなかったという教師が、様々な研修を積み、教材研究に励み、ALT や JTE とコミュニケーションを図りながら英語教育の在り方について学びを深められたことは、本年度の研究の一番の成果と言えよう。

また、昨年度開始した朝の短時間学習については、当初は全校一斉放送で１～６年生までが同じ DVD 教材を視聴していた。しかし、“発達段階に応じた教材の選択”という観点から、今年度三学期よりその方法を見直すことにした。各学級担任が児童の実態に応じた教材を選び、クラスルームイングリッシュを交えながらの指導に変えてからは、児童の取り組む姿勢には大きな変化が見られるようになった。特に高学年は、歌やチャンツ、スキットなどの映像が映し出されても、１年生レベルと同じではかなり幼稚に感じられてしまい、声を出すことに消極的で、前向きに取り組むことができない児童が多かった。それが、書く活動を取り入れるなど、学年独自のカリキュラムで進めるようになってからは、生き生きとした姿に変わり、多くの児童が前向きな姿勢で取り組めるようになった。このことから、どの教材をどのタイミングで与えるべきかを考えることがいかに大切であるか、ということに気付くことができた。

昨年度から継続して取り組んできたこのモーニング・イングリッシュが、児童の間に定着してきていることは手応えとして感じている。しかし、その方法についてはまだまだ模索中であり、来年度にかけて更に検討していく余地がある。

また、今年１年間かけて作成してきた全学年の英語科カリキュラムについては、実際に使っていけるものにするために、来年度１年間かけて検証を行う。英語授業に臆することなく、いつでも、どこでも、誰にでも取り組むことができる、そして何よりも教師自身が力をつけることができたと感じられるようなプログラムを発信していきたい。